

# 恋歌の伝承——但馬皇女と穗積皇子の恋——

竹 嶋 麻 衣

## 一、但馬皇女作歌の物語性

藤原朝の宮廷で起こったある恋愛事件——但馬皇女と穗積皇子の密通——を思わせる歌群が、萬葉集卷二相聞の部に残されている。詠作者の但馬皇女は、天武天皇の皇女であり、母は水上娘。生年は不明であるが、薨去の記事が『続日本紀』和銅元（七〇八）年六月に見える。

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穗積皇子を思ひて作らず歌一首

秋の田の穂向きの寄れる片寄りに

君に寄りな言痛くありとも (②一一四)

穗積皇子に勅して、近江の志賀の山寺に遣はす時に、但馬皇女の作らず歌一首

後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ

道の隈廻に標結へ我が背 (②一一五)

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、竊かに穗積皇子に接ひ、事既に形はれて作らず歌一首

人言を繁み言痛み己が世に

いまだ渡らぬ朝川渡る (②一一六)

一一四番歌の題詞から、但馬皇女が異母兄・高市皇子の宮に妻の一人として同居し、「睦まじい生活」を送っているながら、同じく異母兄の穂積皇子に恋慕の情を抱き、関係を持ったことが知られる。

後代の仮託とされる磐姫皇后歌群を巻頭に据え、藤原朝に至るまでの皇族歌人の歌を多く採録した卷二相聞の部は、伊藤博「卷二磐姫皇后歌の場合」(『萬葉集の構造と成立』上、塙書房、昭49)が「歌物語の趣向のもとに集められ、後人にあるロマンスを感じさせるように配列されている」と指摘するように、「物語性」が非常に強い。但馬皇女の歌に関しては、古くは高野正美「但馬皇女論」(『上代文学』十五、昭38、11)が「悲恋物語として当時の宮廷人の心に同情の涙をそそつた事であらう。」と述べ、川上富

吉「但馬皇女と穗積皇子」(『萬葉集講座』五、有精堂、昭48)が「ロマンスの時間的展開」<sup>3</sup>を推定し、犬養孝「但馬皇女の歌」(『萬葉集を学ぶ』第二集、有斐閣、昭52)が「全体は、渾然とした劇的な物語になっていっているといつてよい。おそらく悲しい歌物語的なものとして伝承されてきたものである。」とするように、その「物語性」「伝承性」が早くから論じられてきた。

夫がありながら別の男性と関係を持ち、人の噂にも負けずに一途に寄り添いたいと歌う一一四番歌。近江崇福寺に派遣された穗積皇子を追いかけたい、その為に目印の標を「旅の無事を祈り、旅路を振り返る境界の地点」である限に結って欲しいと願う一一五番歌。そして密通が発覚して、騒がしくなった周囲の噂に耐えきれず、「朝川」を渡って穗積皇子に会いに行く<sup>6</sup>。一一六番歌。三首の展開が物語的であるがゆえに、歌自体を第三者の創作と見、密通を否定する説もあるが、私はこの歌群が持つ「物語性」は、彼女が実際に起こした恋愛事件にまつわる「伝承」を踏まえて、巻二編者が配列したことによるものだと考える。

その理由としては、事実無根の恋物語が、但馬皇女に仮託され、持統朝の宮廷サロンで享受されたとは考えにくいこと、巻二の三首は類型的な面も多いけれども、例えば「一言」の前では臆してしまうのが常であるのに、皇女はそれ

を物ともしないで乗り越えようとしている点、「ズハ(マシヲ)型の歌は、「物思いをしなくてすむ存在になりた」という「逃げの姿勢」を詠むものであるのに、「追っていきたい」と願っている点、「朝」という特異な時間に、川を渡って穗積皇子に会いに行っている点などに独自性が見出せ、彼女の実作と判断すべきことなどが挙げられるが、最大の理由は三首の配列に、伝承を踏まえたらしき痕跡が認められることである。

再度、三首の題詞を示す。

① 但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穗積皇子を思ひて作らず歌一首(一一四)

② 穗積皇子に勅して、近江の志賀の山寺に遣はす時に、

但馬皇女の作らず歌一首(一一五)

③ 但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、竊かに穗積皇子に接ひ、事既に形はれて作らず歌一首(一一六)

①と③の題詞が重複していることについて、沢瀉久孝『万葉集注釈』(中央公論社、昭33)では「資料本を異にしてをり、集の編者が纂序にあたり原本の題詞のまゝによつたものである。」とし、廣岡義隆「但馬皇女と穗積皇子の歌について―『言寄せ』の世界―」(『人文論叢』二、昭60、3)はそれを更に発展させ、

〔原初状態〕

但馬皇女在高市皇子宮時↓

思穂積皇子御作歌一首

(一一四)

竊接穂積皇子、事既形而

御作歌一首(一一六)

が二本へ分出した結果、卷二成立時には現在のようになつており、それが定着したのではないかとするが、この見解に従えば、編纂以前に既に何らかの題詞が付いていたことになる。よつて、卷二編者が物語的な展開を意図して三首を配列したといつても、それは「伝承」を踏まえて記された題詞に基づくものであり、恋歌の背景までもが編者の創作ではありえない。もし、卷二成立後に伝承が始まっているのなら、その前に付けられた題詞が「物語的」であることの説明がつかないだろう。

また、②の時点で露見していた二人の関係が、③の段階で初めて発覚したように見えることも、題詞を付けた人物と卷二編者が同一人物でなければ問題ない。編者は元々の題詞を尊重したものの、配列に関しては自分が聞き知っていた伝承を参照したのだろう。その結果が現在の配列であり、二人の関係は②の段階で発覚していたと思われる。

おそらくは事件発覚当時―但馬皇女の詠作直後から始まった「恋の伝承」は、題詞が付けられ、卷二相聞の部に収められた後も、長きに渡つて続いていたようである、複数の

伝承の痕跡が見られる。以後、本稿ではその伝承の過程に焦点を当て、但馬皇女と穂積皇子の恋愛事件がどのように享受されていったのかを考えてみたい。

## 二、伝承①―秋の雑歌三首の配列

伝承の痕跡が見える例の一つとして、萬葉集卷八、秋の雑歌の部に収録された二人の作歌を取り上げる。

穂積皇子の御歌二首

今朝の朝明雁が音聞きつ春日山

もみちにけらし我が心痛し(⑧一五二一)

秋萩は咲きぬべからし我がやど

浅茅が花の散りぬる見れば(⑧一五二四)

但馬皇女の御歌一首 一書に云はく、子部王の作といふ

言繁き里に住まずは今朝鳴きし

雁にたぐひて行かましものを(⑧一五二五)

一に云ふ、「国にあらずは」

ここに二人の作歌が続けて載せられていることについて、高野正美「但馬皇女論」(先掲)は「こゝに穂積皇子、

但馬皇女を並べたのも、編者の意図的な配列であり、そうさせたものが二人にまつわる物語性ではなかつたらうかと思われる。」と言う。私はこの見解を支持したい。三首の並びは「単なる偶然」や、実際の贈答に基づくものではなく、傳承を踏まえた編者の配列意図によるものであると思う。

それを論じる前提として、まずは三首の内容について、先行の諸説を参照しつつまとめしておく。

(1) 我が心痛し―相聞の可能性

今朝の朝明雁が音聞きつ春日山

もみちにけらし我が心痛し(⑧二五二三)

作歌時期は「春日山」の所在から、平城京遷都後、即ち和銅三(七一〇)年の秋から穂積覺去の前年、和銅七(七二四)年の秋までと見るものが主流である。しかし、「ケラシ」が「過去の事実、または過去から現在に継続している事実に対する、比較的確実性をもった推量をあらわすのに用いる」助動詞であることから、穂積は実際には黄葉を見ていないとして、遷都以前の作と見る坂本信幸「穂積皇子の御歌、巻八・一五二三をめぐって」(「叙説」十二、昭61・3)もある。

坂本氏は、北島徹「春日山黄葉にけらし我が心痛し―穂

積皇子の恋情―」(「古典と民俗」十五、昭58・1)が、平城京遷都の暁には共に春日山の黄葉を見よう、という約束が二人の間で交わされていたのではないかと推察したのを受けて、和銅二年に穂積が藤原の地にあつて、約束を果たすことなく逝ってしまった但馬を思つて詠んだものと解する。しかし、高市皇子が持統十(六九六)年に亡くなった後、結ばれることのなかつた二人が、遷都後の約束を交わすほど親しい間柄だつたとは考えられない。

また、万葉人にとって「雁が飛来したら黄葉する」というのはごく一般的な認識であつた<sup>13)</sup>。たとえ実景を見なくとも、雁が音から黄葉を連想することは十分可能だつたはずである。やはり遷都後に、身近にある春日山の黄葉を「雁が音」から想像して詠んだと見るのが適当であろう。

さて、約束は無くても、この歌には但馬皇女に対する穂積皇子の思いが込められている可能性はある。新日本古典文学大系本は、「雁声や黄葉に悲哀を起こすこと、万葉集には珍しい。中国文学の『悲秋』の気分の影響があるのではないか。」とするが、坂本氏が「『心痛』い感情は、人間に関わる具体的な強い感情であつて、漠然とした季節などに関わる感情ではない。」と述べるように、集中の「心痛し」を見る限り、「悲秋」とは考えにくく<sup>14)</sup>、但馬皇女への思いと見るほうが自然なのである。

その一方で、「悲秋」の早い例が宋玉「九弁」<sup>(15)</sup>の中に見られ、『懷風藻』にも「悲秋」の概念を踏まえたものが幾つか見られるので、穂積皇子が「悲秋」を意識して詠作した可能性も皆無とは言えないのが実情である。

この問題に関してはまだ考察の余地があると思ふが、現時点の私の考えとしては、集中の「心痛し」(類似の「胸痛し」も含む)の用例の中に、

：立ち留まり我に語らくなにしかももとなとぶらふ聞  
けば音のみし泣かゆ語れば心ぞ痛き：(②二二〇)

：あしひきの山道をさして入日なす隠れにしかばそこ  
思ふに胸こそ痛き：(③四六六)

時はしも何時もあらむを心痛くい行く我妹かみどり子  
を置きて(③四六七)

世の中し常かくのみとかつ知れど痛き心は忍びかねつ  
も(③四七二)

：胸の病みたる思へかも心の痛き我が恋ぞ：この九月  
を我が背子が偲ひにせよと：(⑬三三二九)

右のような挽歌の例が見られ、「黄葉」<sup>(17)</sup>にも、

秋山の黄葉を繁み惑ひぬる妹を求めむ山道知らずも

(②二〇八)

もみち葉の過ぎにし児らと携はり遊びし磯を見れば悲

しも(⑨一七九六)

といった、死者が黄葉を求めて山路を分け入ったり、死者を「黄葉」に例えた例があることを踏まえ、穂積皇子が亡き但馬皇女のことを悼んで詠んだ挽歌的なものと捉えている。

(2) 浅茅が花—寓意の有無

秋萩は咲きぬべからし我がやどの

浅茅が花の散りぬる見れば(⑧一五一四)

黒沢幸三「穂積皇子と但馬皇女」(『文学』四十六卷九号、昭53・9)は、この歌の「浅茅の花の散る」とは但馬のこと、

「秋萩は咲くべくあるらし」は若き大伴坂上郎女との婚儀が整いつつあることを匂わせていると解している。

穂積皇子が晩年、若き大伴坂上郎女を娶つて寵愛したことは、巻四、五二八番歌の左注から分かる。

右、郎女は佐保大納言卿の女なり。はじめ一品穂積皇子に嫁ぎ、寵をかがふること類ひなし。しかくして皇子薨せし後時に、藤原麻呂大夫、郎女を娉ふ。

集中には、

山高み夕日隠りぬ浅茅原後見むために標結はましを

(⑦一三四二)

君に似る草と見しより我が標めし野山の浅茅人な刈り

そね (⑦一三四七)

ま葛延ふ小野の浅茅を心ゆも人引かめやも我がなげなくに (⑪二八三五)

以上三例の、「浅茅」を女性の比喩とした例が見られる。一方「萩」にも、

春日野に咲きたる萩は片枝はいまだ含めり言な絶えそ

ね (⑦一三六三)

我がやどに植ゑ生ほしたる秋萩を誰か標刺す我に知ら

えず (⑩二二一四)

など、同様の比喩が見られる。どちらにも例がある以上、「浅茅」「萩」を但馬もしくは坂上郎女の比喩と考えること自体は可能である。

だが、この黒沢説には大きな欠点がある。「浅茅」は「未成熟の女性」の比喩なのだ。穂積皇子とほぼ同年代<sup>20</sup>と思われる但馬皇女を「浅茅」と見るのは、無理である。「浅茅」が「空言」を導く例 (二七五・三〇六三) もあるので、「実らなかつた恋の相手」ということで但馬が浅茅になるかとも考えたが、「空言」という語がない状態ではそれも難しいだろう。

また、「浅茅が花」という語は集中他に例がなく、萬葉以降にもほとんど見られないので、そのものの状態を想起しにくく、「寓意」を持たせるのには不向きである。

従つてこの歌からは但馬皇女への想いを読み取り得ない。穂積皇子が平城京の邸で実景を見て詠んだ、単なる季節詠と見るべきであろう。詠作時に坂上郎女と結婚していたかは不明だが、この歌と郎女の「妹が目を始見の崎の秋萩はこの月ごろは散りこすなゆめ」(⑧一五六〇) を贈答と見る、赤羽学『万葉集』巻八・一五六〇「始見之崎」の訓み方と穂積皇子と坂上郎女の相聞の可能性」(岡山大学文学部紀要) 五、昭59・12) には賛同出来ない。

(3) 子部王と但馬皇女——一五一五番歌の仮託性

穂積皇子の二首に続く但馬皇女の歌は、「今朝鳴いた雁」を主眼に置いている点で、穂積の一首目 (一五一三) と何らかの関連があるようにも見えるが、一五一三が平城京遷都後の作である以上は、和銅元(七〇八)年に世を去った但馬と贈答することは出来ない。

但馬皇女の御歌一首 一書に云はく、子部王の作といふ

言繁き里に住まずは今朝鳴きし

雁にたぐひて行かましものを (⑧一五一五)

一に云ふ、「国にあらずは」

題詞には「一書に云はく、子部王の作といふ」とあり、

作者が但馬でない可能性が示唆されている。また、本文にも異伝が見られる。子部王は伝未詳だが、次の児部女王と同一人物であろうか。

児部女王の嗤ふ歌一首

うまし物いづくも飽かじを坂門らが

角のふくれにしぐひあひにけむ(⑩三八一二)

右、時に娘子あり、姓は尺度氏なり。この娘子は高姓の美人の誂ふ所を聴さず、下姓の媿士の誂ふ所を応許す。ここに児部女王この歌を裁作り、その愚を嗤笑ふ。

神永あい子「但馬皇女論―物語性をめぐって―」(「青山語文」七、昭52・3)は、但馬皇女歌の独自性を「類型表現」の面から考察している。この歌に関しては「ズハーマシラ」型こそ類型的だが、恋の苦しみから逃れる手段として、別の存在となることを願うものが主流の中で、自分を変ええず「雁」と共に行こうとする所に独自性が見られると言う。

確かに「ズハーマシラ」型の歌―中でも「恋ひつつあらずは」という形式のものは、物思いをせずにすむ存在になりたい、いっそ死んでしまいたい、というような歌ばかりである。その点で当該歌には一応の独自性があると言える。しかしこの歌と前半が類似した一一五番歌、同じように人

言に悩まされる一一六番歌と較べると、その「独自性」は弱いと言わざるを得ない。第三者が、卷二の三首を踏まえた上で代作することも、十分可能であろう。

私は、但馬皇女が詠んだ卷二所収の三首の内容、及び二人の恋にまつわる話を見聞していた子部王が、但馬皇女に仮託する形で一五一五番歌を詠んだものと考ええる。そう捉えることで、一五二三番歌との対応関係にも一応の説明が付く。

賀古明「但馬皇女と穂積皇子との恋」(「国文学」十一卷十三号、昭40・11)ではこの歌を「但馬皇女の遺品の中から、穂積皇子の手元に届けられたもの」と推察し、「この但馬皇女の遺詠が、穂積皇子の二首を詠出する心情を誘い起こしたのではなからうか。」とするが、作者が子部王であれば、その逆―子部王が穂積の一五二三番歌に対応する形で一五一五番歌を詠んだ―と考えられる。穂積皇子作歌に一五一五が先行するならば、一五一三で穂積が「春日山の黄葉」を見て心を揺さぶられた理由を明確に出来ないが、逆であれば一五一三は独詠となり、一五一五との共通項を見出す必要はなくなる。

この歌が異伝の形でしか、子部王の作として伝わらなかったのは、やはり但馬皇女に仮託したものであり、いつしか但馬皇女の作歌として伝承されるようになったからで

あろう。

\*

以上のことから、ここには「亡き但馬皇女への哀悼の念」を詠んだものと、単なる季節詠と、「但馬皇女に仮託した子部王の歌」とが並んで配されているということになる。この配列に、編者の「意図」は見出せるのかどうか。

廣岡義隆「但馬皇女と穗積皇子の歌について——『言寄せ』の世界——」(先掲)はここで三首が並んでいることについて、「資料本において並んでゐたから」とし、編者の意図を否定する。また、神永あい子「但馬皇女論——物語性をめぐって——」(先掲)は編者が意図して並べた可能性を示しながらも、「しかし一五一五番歌は明らか相聞歌とは受取り難いとして雑歌に加えられたと見れば、歌は部立毎に年代順に収録され、同時代の皇子・皇女の歌は、皇子・皇女の順に載せられるのが原則である事により、これらの歌が並ぶのも当然の結果ともなる。否定される可能性も十分あるという程度では、編纂者に何らかの配列意図があったとしても、甚しく介入されたとは考えられない。」と結論付けている。

その一方で新編日本古典文学全集本の一五一三番歌注、「結句『我が心痛し』というその原因が何か不明だが、この後に但馬皇女の歌(一五一五)を置いた編纂者の気持と

しては、この歌を但馬皇女を追慕しつつひっそりと、平城京域内の居宅に籠居する皇子の姿を想像したものであろうか。」のように、編者の意識に言及したものも見られる。

廣岡氏の見解のように、三首が原本の段階で並んでいた可能性はゼロではない。だが穂積皇子の二首は同時詠ではないし、後になって仮託されたと思われる一五一五番歌とひとまとまりで伝えられたとは考えにくい。また、これは神永氏の論にも関わることであるが、一五一五番歌は明らかに「相聞歌」である。それは、集中「言——繁」という表現を用いたものの大半が相聞歌であることから分かる。<sup>24)</sup>

仮に三首が原本段階でまとまっていたとしても、編纂の時点で、明らか相聞歌を雑歌の部に共に配すだろうか。但馬皇女と穂積皇子の恋愛事件を聞き知っていた巻八編者が、意識的に三首を並べたと考える方が自然ではないだろうか。

萬葉集の季節分類歌巻、巻八と巻十の分類基準に関しては、渡瀬昌忠氏の論<sup>25)</sup>や村瀬憲夫「万葉歌の分類——巻八と巻十における『雑歌』と『相聞』——」(『萬葉集編纂の研究』塙書房、平14、初出・平7・9)に詳しい。村瀬氏は一五一五番歌について、

：この歌も「相聞」部に収められても一向におかしくはない。それに、作者が但馬皇女であり、異母兄の穂



積皇子との間に残した悲恋の歌が、卷二の「相聞」部を飾り、しかもその歌句が「恋ひつつあらずは」(②一五)、「人言を繁み言痛み」(②一六)と、この歌と通じる趣をもっていることからすれば、なおさらである。

ところが実際には「雑歌」部に配されている。：(中略)：また一方でこの歌の直前には穂積皇子の歌が配されており(⑧一五三、一五四)、とりわけ卷八の一五三番歌は、雁を詠み、しかも「我が心痛し」という恋の心痛を想像させるような表現を有している。

以上の種々のことを勘案すると、編者は、有名な二人の關係を巧みに利用して、直接的表面的には秋の景物を詠んだ雑歌として配し、その後には二人の悲恋の情を匂わせるといふ、歌の配列の妙を考案したのではないか。

と述べている。表面的には「雑歌」で、背後に「相聞」を匂わせる「配列の妙」といふよりは、卷二のような「物語的な展開を意識した配列ではないかと私は考えるのだが、何れにせよ卷八編者に「伝承」を踏まえた「配列意識」があったことは間違いないだろう。

村瀬氏は同論文の中で、卷八雑歌の部所収の「相聞」的な歌の多くが、「作者が伴氏の人物か、伴氏と直接『和』

している歌」であることを指摘している。そして、そのような傾向が見られる理由として、卷八の編纂に、伴家持及び叔母の坂上郎女が関与しているがゆえに、題詞には記載がない作歌事情を、編者が良く知っていた、或いは意図的に題詞には触れなかった、という二点を示しておられる。

この見解に拠るならば、晩年の穂積皇子の妻で、作歌事情も熟知していたはずの坂上郎女が、敢えて実態を隠して、意図的に三首を並べたとも考えられよう。郎女が一五三番歌を、但馬皇女と子部王、どちらの作歌と認識していたかは不明であるが、穂積皇子と但馬皇女の恋愛事件を読み手に想起させるために、わざと並べたものと理解したい。その場合、例え編者は別人であったとしても、坂上郎女の蒐集した資料に基づいて配列したのであれば、先に述べた「配列意図」は編者ではなく、郎女の方であったことになる。卷八には皇族歌人の歌が多く収録されているが、この三首のような「物語」的な配列を持つものは他にない。坂上郎女が穂積皇子の妻でなかったら、三首も現在のような配列ではなかったのではないかと思う。

### 三、伝承② 歌経標式

藤原浜成の撰で宝亀三(七七二)年五月成立の歌学書「歌

経標式」にも、但馬皇女の作歌が載っている。この歌を考察することで、萬葉集とは異なる伝承の痕跡を探ってみた。

：失てるは、但馬内親王の穂積親王に答ふる歌に曰へるが如し。

いまさらになにかおもはぬうかなびく

こころはきみによりにしものを (二ノ七遍身)

この「但馬内親王の穂積親王に答ふる歌」というのを信じるならば、穂積皇子が但馬皇女に贈った歌が先にあったということになる。

黒沢幸三「穂積皇子と但馬皇女」(先掲)では、これを但馬皇女の実作と捉え、「穂積・但馬の若き日にまつわるいい伝え」ではないかとしているが、黒沢氏も指摘するように、この歌は次の安倍女郎歌と酷似している。

安倍女郎が歌二首

今更に何をか思はむうちなびく

心は君に寄りにしものを (『万葉集』④五〇五)

集中にこの安倍(阿倍)女郎の名は何度か見られるのだ

が、時代が一定でない。

① 安倍女郎が屋部の坂の歌一首 (③二六九)

② 阿倍女郎が歌一首 (④五一四)

中臣朝臣東人、阿倍女郎に贈る歌一首 (五一五)

阿倍女郎が答ふる歌一首 (五一六)

③ 大伴宿禰家持が安倍女郎に贈る歌一首 (⑧一六三一)

五〇五番歌の安倍女郎と、①は同一人物とされる。②は少し時代が下り、③に至っては明らかに別人である。従って少なくとも二人は「安倍女郎」という女性が存在したことになる、五〇五番歌の安倍女郎の正確な時代は不明である。

彼女が奈良朝の歌人であれば、和銅元(七〇八)年に没した但馬の歌が先にあり、安倍がそれを利用したということになるが、この安倍の歌には、

水底に生ふる玉藻のうちなびく心は寄りて恋ふるこの

ころ (⑪二四八二)

紫の名高の浦のなびき藻の心は妹に寄りにしものを

(⑪二七八〇)

今更に何をか思はむ梓弓引きみ緩へみ寄りにしものを

(⑫二九八九)

など類歌があり、特に目新しい発想は見られない。仮に但馬皇女の作だとすると、彼女がまだ少女の頃、「習作」として詠んだものかとも考えられるが、歌の内容としては、やはり穂積皇子を念頭に置いた方が理解しやすい。

もし安倍女郎が但馬皇女と同時代の人間であれば、但馬の近くに仕えていた安倍が、但馬に代つて穂積に歌を贈つたということも考えられよう。しかし集中には穂積皇子が但馬皇女に贈つた歌というのはいつも残されていないし、穂積が詠んだとされる歌でこの「今更に」の歌に対応するようなものもない。萬葉集に入れられなかつた穂積の歌が、『歌経標式』の撰者である藤原浜成の手元にあつたとも考えづらい。やはりこの歌は安倍女郎が詠んだもので、伝承の過程で誤つて但馬の歌と解された、もしくは安倍が但馬に仮託して詠んだ、と見るべきではないか。

中西進「二十卷万葉集の形成—平安朝文献の意味—」(万葉論集第六卷『万葉集形成の研究 万葉の世界』講談社、平7。初出・昭43)の中で、中西氏はこの「今更に」の歌について、

大来・大津物語と共に有名だったのが、但馬・穂積事件だったのだろうか。万葉でもこの関係は多くの歌の採録となって現われ、それが、各処に登場することをもつても、人気の度合が知られる。(中略)：この

悲恋物語の伝承がいつか安倍女郎の歌をも取り入れてしまふということは、あり得ることだ。

とし、この歌を「そこに生じた異伝ではないか。」と述べている。私も同意見である。

『歌経標式』にはこの但馬皇女と安倍郎女の歌のように、萬葉集と作者が異なる歌が幾つか見られる。例えば、次の角沙弥の歌。

：角沙弥が記の浜の歌に曰へるが如し。

しらなみのはままつがえのたむけぐさ

いくよまでにかとしのへにけむ(三ノ二ノ七 離韻)

萬葉集には次のような小異歌がある。

紀伊国に幸せる時に、川島皇子の作らす歌

或は云はく、山上憶良の作なり、といふ

白波の浜松が枝の手向くさ

幾代までにか年の経ぬらむ(①三四)

一に云ふ、「年は経にけむ」

更にこの小異歌が、次の憶良の歌である。

山上の歌一首

白波の浜松の木の手向くさ

幾代までにか年は経ぬらむ(9)一七一六

右の一首、或は云はく、川島皇子の御作歌といふ。

つまりこの歌は萬葉集においても作者が「川島皇子」であつたり「山上憶良」であつたりするのである。この問題については、憶良が川島皇子の代作をした、或いは憶良が詠んだ歌ではあるが、川島皇子の作として公表された、などという見方が一般的である。

中西氏は、『歌経標式』が作者とする「角沙弥」(二ノ四にも登場)を、卷三・二九二〜二九五番歌の作者「角麻呂」と同一人物ではないかとし、彼を川島・憶良に続く「第三の作者」と位置付ける。そしてその異伝を許容する背景が萬葉の中に窺われるとする。浜成が知るこの歌の作者は角沙弥であり、浜成は萬葉集を見ても見なくても、おそらく「角沙弥」と記載したのでらう。萬葉の編者が見聞きしたのとは別の伝承が、浜成の周辺にはあつたと考えられる。

また、集中では作者未詳であつたものに作者名が付加されてゐる場合もある。

：得たるは、柿本若子の秋の歌に曰へるが如し。

あきかぜのひにけにふけばみづくきの(二ノ一頭尾)

この歌は「秋風の日に異に吹けば水茎の岡の木の葉も色付きにけり」(10)二一九三と第三句までが一致している。ただし作者は柿本若子(人麻呂か)ではなく、作者未詳歌である。

：高市里人の秋の歌に曰はく、  
しらつゆとあきのはぎとは(二ノ二胸尾)

作者の高市里人は未詳。「黒」の誤写で、「高市黒人」のことかという。この歌も第二句まで同じ歌が卷十に見える。

白露と秋の萩とは恋ひ乱れ

別くこと難き我が心かも(二二七一)

先の例同様、これも作者未詳歌である。これらは元々人麻呂ないし黒人の作歌だつたものが萬葉集で作者未詳とされたのではなく、元々作者未詳であつたものに、著名な歌人の名が付加され、伝承されていったものと考えられる。

これらの例から、浜成の周辺には、萬葉の編者が見聞きしたのとは異なる伝承が存在したことが確認出来る。安倍女郎の歌が但馬皇女の作歌として伝えられたのも、浜成が

伝承に基づき、そう認識していたからであろう。

やはり但馬皇女の恋にまつわる伝承は、卷二相聞の部に、物語的な題詞と共に配列されてから起こったものではなく、それ以前から存在していたはずである。伝承の一端が萬葉集に、別の一端が藤原浜成を通じて『歌経標式』にいった結果、「今更に」の歌が但馬皇女の作として『歌経標式』に載ったものと推察出来る。

もつとも、伊藤博『万葉集の構造と成立』（塙書房、昭和49）によれば、萬葉集卷二は元明天皇の時代に成立しており、浜成が卷二を見ていた可能性は十分ある。『歌経標式』に収められた大伯皇女の作歌、

失てるは、大伯内親王、大津親王を恋ふる歌に曰へるが如し。

かむかぜのいせのくににもあらましを（二ノ二胸尾）

失てるは、大伯内親王の齋宮より至りて大津親王を恋ふる歌に曰へるが如し。

みまくほりわがもふきみもあらなくに  
なにかきけむうまつからしに（二ノ六同声韻）

が萬葉集卷二挽歌の部の、

大津皇子の薨せし後に、大伯皇女、伊勢の齋宮より京に上る時に作らす歌二首

神風の伊勢の国にもあらましを

なにか来けむ君もあらなくに（②一六三）  
見まく欲り我がする君もあらなくに

なにか来けむ馬疲るるに（②一六四）

とほぼ一致することからも、浜成が卷二を踏まえて例歌の作歌事情を記した可能性は高いと言えよう。そうなると浜成は自身の周辺にあつた伝承だけでなく、卷二の記載も参考にして、但馬皇女の歌をここに載せたことになる。

#### 四、伝承者としての坂上郎女

但馬皇女と穂積皇子の恋愛事件は、持統朝の一大スキヤンダルとして、「密通」発覚当初から盛んに噂されていたものと考えられる。そして、事件の当事者全てが世を去つた後は、その噂は「伝承」に形を変え、事件を知らない人々の間でも語り継がれていくようになったのだらう。卷二相聞の部で、但馬皇女作歌三首（一一四〜一一六）が「歌物語的」に配列された背後には、この「伝承」が存在してい

たはずである。

萬葉集卷二相聞の部は、はじめに述べたように「物語性」が非常に強く、「白鳳宮廷ロマンス歌集<sup>23</sup>」と称されるが、その中核を成すのが、「石川郎女(女郎)」を巡る歌群である。阿蘇瑞枝「石川郎女」(『萬葉和歌史論考』笠間書院、平4、初出・昭52)は、彼女を坂上郎女の母である「石川内命婦<sup>24</sup>」と同一人物であると、彼女の字が「山田郎女」(②一二九左注)であることから、山田の地を本居とした蘇我倉山田石川麻呂の系統であった可能性が高いと言う。「石川郎女」の娘が坂上郎女であれば、「石川郎女」を巡る恋の歌を蒐集し、卷二編者に伝えた人物として、坂上郎女を想定することも十分可能であろう。

先に、卷八の穂積・但馬作歌を蒐集した人物として坂上郎女を想定することも可能かと述べたが、卷二の「石川郎女」歌群にも、坂上郎女の介入が認められるなら、それと同様に、但馬皇女の三首(一一四―一一六)を伝えたのも彼女ではないだろうか。

坂上郎女が二人の恋愛事件を知っていたことを証明する歌が、卷八・秋の雑歌中にある。

吉隠の猪飼の山に伏す鹿の

妻呼ぶ声を聞くがともしさ(⑧一五六一)

集中「吉隠の猪飼」を詠んだものは、この他にただ一例。穂積皇子が亡き但馬皇女を思つて詠んだ挽歌のみである。

但馬皇女の薨せし後に、穂積皇子、冬の日雪の降るに、御墓を遙かに望み、悲傷流涕して作らす歌一首

降る雪はあはにな降りそ吉隠の

猪養の岡の寒からまくに(②二〇三)

この二首の関連について、赤羽学『萬葉集』卷八・一五六〇「始見之崎」の訓み方と穂積皇子の相聞の可能性(先掲)の中に、興味深い見解が示されている。

一五六一の歌が、但馬皇女を失つて悲嘆にくれる穂積皇子の姿を寓していると思れば、郎女は、但馬皇女在世中から皇子の寵を受けており、穂積皇子に呼ばれる亡き但馬皇女に対して、羨望とも嫉妬ともつかぬ複雑な女性心理の渦中にあり、それが下句の「ツマヨブコエラキクガトモシサ」に表白されたものと思われる。

一五六一番歌の詠作時期は、配列的に穂積皇子薨去後と思われるので、その点では赤羽氏の論に賛同は出来ないのだが、「ともし」を「亡き但馬皇女への羨望」とする見方は支持したい。遠藤宏「猪飼の山の鹿鳴―大伴坂上郎女の

羨望―」（「文教大学女子短期大学部・文芸論叢」二十七、平3・3）でも同様に、但馬への郎女の羨望を読み取っている。

穂積皇子の挽歌と、但馬皇女への思いを知らなければ、一五六一番歌は詠めない。郎女は全てを知った上で、穂積の寵愛を受け入れていたはずである。巻二と巻八、双方に彼女の関与が認められれば、どちらにも同じ「伝承の痕跡」が見られることに説明が付く。また、巻八の三首（一五一一―一五一一五）が、巻二相聞の部同様に、「物語的」に配列されていることにも納得がいく。

こうして、二度に涉つて坂上郎女の手を経た、但馬皇女と穂積皇子の恋にまつわる伝承は、郎女亡き後も続いていたようで、萬葉の時代から遙かに下った『古今和歌六帖』の中にも、巻二の但馬皇女作歌を見出すことが出来る。

秋の田のほにけのますらかたよりに君がよりなば

こちよくならん（一一二一、ほづみのわうじ）

おくれゐてこひつつあらずはおひゆかん

みちのまにまにしめゆへわがせ

（二六一〇、みしまの王女）

ひとごとをしげみこちたみおひのよにいまだわたらぬ

あさかはわたる（二六六四、ほづみの王子）

だが、ここではもはや作者「但馬皇女」の名は消え、彼女の恋にまつわる伝承だけが残った状態である。二首の作者が「穂積皇子」であることが、まだ若干事実を伝えてくれるものの、二人の恋はこの頃には著しく抽象化され、曖昧なものとなつてしまつていると言えよう。それでもこの時代まで伝承が続いていたことは確かであり、藤原朝から平安時代の中頃に至るまで、人々に愛され、語り継がれた歌群であつたことが認められる。

\*

以上、本稿では但馬皇女と穂積皇子の恋に関する「伝承」の過程について考察し、巻二の但馬皇女作歌の配列、巻八の秋の雑歌三首の配列、『歌経標式』の但馬皇女歌、いづれにも伝承の痕跡が見られることを確認出来た。筆者は、伝承の鍵を握る人物として、大伴坂上郎女を想定したが、このことは巻二相聞の部の編纂にも関わってくる重要な問題であると考ええる。

〈注〉

底本として、新編日本古典文学全集（以下『新編全集』）の『万葉集』を使用した。その他、『歌経標式』は沖森卓也ら『歌経標

式注釈と研究」(桜楓社、平5)、「懷風藻」は林古溪「懷風藻新註」(明治書院、昭33)を使用している。また、以下の書名は便宜上、日本古典文学大系は『旧大系』、新日本古典文学大系は『新大系』、日本古典文学全集は『旧全集』と表記する。

1. 岡内弘子「但馬皇女御作歌三首」(『萬葉学藻』塙書房、平8)  
穗積皇子は吉野の盟約に名を連ねていないことから、天武の皇子の中では年少の方と見られている。武市香織「天武諸皇子の出生順と統紀の序列基準について」(『万葉』一七三、平12・5)などによれば「第六子」。
2. 川上氏は「高市皇子と十市皇女」「高市皇子と但馬皇女」「但馬皇女と穂積皇子」「穂積皇子と大伴坂上郎女」「坂上郎女と藤原麻呂(或いは大伴宿奈麻呂)」という「ロマンスの時間的展開」が意図されていたと推定している。
3. 「標」に関しては従来の「道しるべの印」という見解を否定し、「通せんぼの縄」と解する浅見徹「標結へ我が夫」(『万葉学論攻』統群書類従完成会、平2)や『新編全集』、「追ひ及かむ」の時点で但馬は既に、穂積の占有する土地の内側にあるので、二人を追う者の立ち入りを阻むための標とする、神永あい子「標結へ我が背——但馬皇女が望んだもの——」(『青山語文』三十一、平13・3)もあるが、集中には「大伴の遠つ神祖の奥つ城は著く標立て人の知るべく」(⑩四〇九六、家持)のように「目印」と解せる「標」の例もあることから、ここは従来通り「道しるべ」と解して良いと思われる。
4. 井手至「上代における「限」」(『遊文録』説話民俗篇、和泉書院、平16、初出・昭54)によると、「限」には邪悪な者の異郷からの

侵入を遮り遠ざける手立ての一つとして「障神」が祭られており、「限」に入る必要に迫られた者は、その神に手向けをし、路を捧げて鎮魂し、危険が身に及ばないように通行許可を得なければならぬと信じられたという。また、集中の用例を検討すると、「限」が旅路の途中に良く出てくる。

：川限の八十限落ちず：かへり見しつ

：行き隠れる島の崎々限も置かず 玉梓の道行き暮らし：(①七九)

：道の限八十限ごとく 思ひそ我が来る旅の日長み(⑥九四二)

：道は限八十限ごとく 我が過ぎ行けば いや遠に里離り来ぬ：(⑬三三四〇)

百限の道は来にしをまた更に 八十島過ぎて別れか行かむ(⑳四三三九)

これらの例から窺える「限」の性格は「旅人がそこで一度立ち止まり、通つて来た道を振り返る」境界の地点だということである。

「朝川渡る」の解釈はおよそ以下の通り。

・「浅川」≡浅い契り

：『万葉考』、中西進「水辺の婚」(『万葉論集第二巻』『万葉集の比較文学的研究(下)』講談社、平7)

・死者の川渡り

：藤田勝「朝川渡る」の解釈について(『美夫君志』二十一、昭52・2)、森重敏『万葉集采抄』(和泉書院、平4)

・恋の成就を願う。

：『万葉代匠記』精撰本、伊藤博『万葉集釈注』

・実体験



a. 但馬皇女が朝、川を渡って穂積皇子に会いに行った。

：新田全集、新田大系、岡内弘子先掲論文など。

b. 但馬皇女が朝、川を渡って穂積皇子の所から帰って来た。

：土屋文明『万葉集私注』稲岡耕二『万葉集全注』黒沢幸三『穂積皇子と但馬皇女』(『文学』四十六卷九号、昭53・9)など。

単なる比喩表現と見るには「己が世」「朝川」などの表現が「異質」であり、やはり実体験を詠んだものと考えられるが、bの場合、「朝」は男女が逢って別れる時である。異常な仲であればあるほど、むしろ暗い夜に尋ねて夜の明けぬうちに帰るのが普通であろう。」という『釈注』の指摘する疑問が残る。したがって、ここは朝、逢いに行ったと解するべきだと思うが、前歌で近江に派遣された穂積を追っていったとする岡内氏の見解には従えない。賀古明「但馬皇女と穂積皇子との恋」(『国文学』十一卷十三号、昭40・11)や廣岡義隆「但馬皇女と穂積皇子の歌について——『言寄せ』の世界——」(『人文論叢』二、昭60・3)では、題詞に記されている二人の密通事件を否定するが、私は例え題詞が後付けのものであったとしても、事件そのものは「創作」ではなく「実体験」であると考ええる。

8. 集中の「ズハ(—マシヲ)」型の例を見ると、

後れ居て恋ひつつあらずは紀伊の国の妹背の山にあらましものを(④五四四)

後れ居て長恋せずはみ園生の梅の花にもならましものを(⑤八六四)

なかなかに君に恋ひずは比良の浦の海人ならましを玉藻刈りつつ(⑪二七四三)

のように、(恋の)物思いをしなくて済む別の存在になりたいと

願うか、

かくばかり恋ひつつあらずは高山の岩根しまきて死なまし

ものを(②八六)

秋秋の上に置きたる白露の消かもしなまし恋ひつつあらずは(⑧一六〇八)

我妹子に恋ひつつあらずは刈り薦の思ひ乱れて死ぬべきものを(⑪二七六五)

のように、「いっそ死んでしまいたい、消えてしまいたい。」という嘆きを詠んだものばかりである。従って、但馬皇女の一一五番歌のような「追っていきたい」という積極的な行為を詠んだものは異例であると言える。

9. 廣岡氏は一一五番歌を、類型表現の中にあるものとし、但馬皇女の真作ではなく、第三者の仮託ではないかとする。その為、「原初段階」に一一五番歌は含まれていない。だが私は一一五番歌も但馬皇女の実作と見る。

10. 穂積皇子の近江派遣については、単なる勅使と見るもの(賀古明先掲論文、黒沢幸三先掲論文)と、但馬皇女とのことが原因とするもの(『万葉集私注』)とがあるが、史書に記録がないこと、題詞は編者の完全な創作とは考えづらなことなどから、二人の密通発覚後、持統天皇の配慮で事件のほとぼりが冷めるまで穂積を一時都から遠ざけた、というのがこの派遣の実態であると思われる。よって、一一五の時点で既に密通は発覚していたはずである。

11. 『時代別国語大辞典』上代編(三省堂、昭42)

12. 黒沢幸三先掲論文では、大宝三年頃のものとして推定される藤原宮跡出土の木簡に「多治麻内親王宮」と記されていることに着目し、「高市との間に子のなかった皇女はあらたに内親王の宮を設

13. 營し、寡婦として生活していた」と推察する。この木簡は、但馬と穂積の再婚を否定する重要な物証といえよう。

雁の飛来時期と黄葉の時期はほぼ一致する。

雁がねは今は今来鳴きぬ我が待ちし黄葉はや継げ待たば苦し  
も (10) 二一八三)

雁がねの来鳴きしなへに韓衣竜田の山はもみちそめたり (10)  
二一九四)

雁がねの声聞くなへに明日よりは春日の山はもみちそめな  
む (10) 二一九五)

大原真人今城の歌に「秋されば春日の山の黄葉見る奈良の都の荒るらく惜しも」(8) 一六〇四) とあることから分かるように、平城京の人々にとって「春日山」は非常に馴染みのある、黄葉の名所であったようだ。

14. 集中の「心痛し」(類似の例も含む。)には「季節に対する感慨」と捉えられるものは一つもない。

秋といへば心そ痛きうたて異に花になそへて見まく欲りか  
も (20) 四三〇七)

移り行く時見るごとに心痛く昔の人し思ほゆるかも (20)  
四四八三)

右に示した家持の例は、一見すると「季節に対する感慨」に見えるが、前者は七夕歌であり、後者の主題は「季節の推移」ではなく「時勢の移ろい」にあるので、どちらも「悲秋」のような漠然とした感慨とは異なる。

15. 宋玉は、師・屈原の心になって原の辞句を用い、原の為に「九弁」を詠んだとされる。「九弁」の第一段に、「悲哉秋之為気也 蕭瑟兮草木搖落而變衰」(悲しいかな、秋の気たるや。蕭瑟たり、草

木揺落して変衰す。)とある。(星川清孝『楚辞』新釈漢文大系、明治書院、昭45参照。)

16. 穂積皇子の時代より少し下るが、下毛野虫麻呂の漢詩に、宋玉「九弁」の内容に触れた箇所があるので挙げておく。(「懐風藻」六五番) これは穂積皇子が「九弁」を目にしていたという一つの傍証になろう。

五言秋日於長王宅宴新羅客

夫秋風已発張歩兵所以思婦秋氣可悲 宋大夫於焉傷志・

(それ秋風すでに発す。張歩兵が、婦を思ふゆゑん。秋氣、悲しむべし。宋大夫、ここに志を傷ましむ。)

「宋大夫」とは宋玉のことであり、「秋氣可悲」というのも「九弁」の「悲哉秋之為気也」を踏まえたものである。小島憲之「漢字・漢文学のもたらしたもの」(『講座日本文学』1・上代編1、岩波書店、昭43)によると、宋玉「九弁」を踏まえて詠作された、文選所収の晋人潘岳の「秋興賦」という作品があり、この賦を元にして詠まれたのが次の石上乙麻呂の漢詩であるという。(「懐風藻」一一三番)

五言贈掾公之遷任入京一首

余含南裔怨君詠北征詩 詩興哀秋節 傷哉槐樹衰 彈琴顧落景

歩月誰逢稀 相望天垂別 分後莫長違

(余は含む、南裔の怨、君は詠す、北征の詩。詩興、秋節を哀れむ、痛ましいかな、槐樹の衰ふること。琴を弾じて、落景を顧み、月に歩して、誰逢稀。相望んで、天垂に別る。分後、長く違ふことなかれ。)

また藤原宇合が常陸の官であった時、京に残っている友人に送った詩(「懐風藻」八九番)の中に見られる「懸榻長悲揺落秋」(榻

を懸けて長く悲しむ、揺落の秋」にも、同じく「秋興賦」の影響が見られるという。従つて、和歌の世界では余り浸透しなかつた「悲秋」の概念も、漢詩の世界では一般的であつたようだ。

17. 挽歌に見られる「黄葉」の例は全十例。

ま草刈る荒野にはあれどもみち葉の過ぎにし君の形見とそ来し (①四七)

：沖つ藻のなびきし妹はもみち葉の過ぎて去にきと玉梓の使ひの言へば： (②二〇七)

もみち葉の散り行くなへに玉梓の使ひを見れば逢ひし日思ほゆ (②二〇九)

見れど飽かずいましし君がもみち葉のうつろひ行けば悲しくもあるか (③四五九)

秋山の黄葉あはれとらぶれて入りにし妹は待てど来まさず (⑦一四〇九)

：筑紫の山のもみち葉の散り過ぎにきと君がただかを (⑬三三三三)

：いつしかと我が待ち居ればもみち葉の過ぎて去にきと玉梓の： (⑬三三四四)

もみち葉の散りなむ山に宿りぬる君を待つらむ人しかなしも (⑮三六九三)

18. 黒沢氏は、雁の飛來の時期が萩の咲き始めの時期に近いこと、大和で萩が咲き出すのが八月中旬であることを踏まえ、この歌を五一四と同時期の詠として、「但馬皇女の命日は六月二五日で、これは陽曆の八月一四日にあたる。すると穂積は明白に但馬皇女の命日を意識して作歌していることになる。」とするが、一五一四番歌からは但馬皇女への思いを想起出来ないし、「秋

萩は雁に逢はじと言へればか声を聞きては花に散りぬる」(⑩二二二六) などを見るに、實際は萩の開花の方が少し早かつたようなので、二首は同時詠ではないだろう。

19. 「浅茅」を比喻で用いた例を見ると、三例中二例に「標」が結ばれている。これは「浅茅」に限つたことではなく、植物を女性の比喩とした時に、「標」を結ぶ例は多い。「標」を結う植物は、

まだ自分の所有にはなつておらず、何れ手に入れる為に、即ち自分の妻とする為に、印だけ残しておくのである。よつて、植物⇨相手の女性はまだ結婚適齢期には至つていない、未成熟の娘でなければいけない。

20. 但馬皇女の母・氷上娘は天武十一(六八二)年に薨じているので、但馬はそれ以前の生まれであり、また持統四(六九〇)頃には結婚適齢期になつていたはずである。穂積皇子は、浄広弑位の叙位年齢が二十一歳前後とされているので、天智十(六七二)年頃の出生。高市皇子は天武の長男で、持統十(六九六)年に、

四十二或いは四十三歳で薨去しているので、但馬皇女が穂積皇子に近い年齢であつたことは疑いない。

21. 赤羽氏は黒沢氏と同様に「浅茅」を但馬と見て、「秋萩であるあなた―坂上郎女の花開く番がきたよ」と歌い贈つたものとするが、但馬は「浅茅」ではありえない。また、仮に坂上郎女の

一五六〇と贈答関係にあつたならば、編纂に携つたことされる郎女が、敢えて離れた場所に自身の作歌を並べた理由が判然としない。やはり贈答とは考えられない。

22. 注8参照。

23. 注18参照。

24. 例外として、

五年正月四日に、治部少輔石上朝臣宅嗣の家にして宴する歌三首

言繁み相問はなくに梅の花

雪にしをれてうつろはむかも(19)四二八二

右の一首、主人石上朝臣宅嗣

七年乙亥、大伴坂上郎女、尼理願の死去しことを悲嘆して作る歌一首

たくづつの新羅の国ゆ人言を良しと聞かして問い放くる

(3)四六〇

以上二例が挙げられるが、前者は渡辺護「梅の花雪にしをれて

勝宝五年正月四日の宴歌三首」(『万葉』一〇四、昭55、7)などによって、相聞歌に擬したものであると指摘されている。

従って相聞的内容と受け取れないのは集中僅か一例、「日本が住

み良い国であるという人の噂」を表す四六〇番歌しかない。よっ

て、「言」「人言」と言った場合、万葉人はすぐさま「恋の噂」を想起したはずである。

25. 渡瀬昌忠「題詞の論」(『柿本人麻呂研究歌集編上』桜楓社、昭48)

阿蘇瑞枝「万葉集の四季分類―季節歌の誕生から巻八の形成まで―」(『万葉和歌史論考』笠間書院、平4)、原田貞義「大伴坂上郎女圏の歌」(『万葉集の編纂資料と成立の研究』おうふう、

平14、初出、昭59)塩谷香織「万葉集卷三三四・四・八の成立過程について」(『万葉集研究』第十四集、塙書房、昭61)など。

27. 本稿の底本とした『新編全集』では、この歌を「白露と秋萩とは」と訓んでいたが、『万葉集注釈』『万葉集注』『新大系』

など、他の注釈書が「秋の萩とは」と訓んでいたものでそれに従っ

た。歌経標式の原文は「旨羅都由等阿岐能婆宜等婆」なので「秋萩とは」とは訓めない。

28. 伊藤博「巻二磐姫皇后歌の場合」(『万葉集の構造と成立』上、塙書房、昭49)

29. 巻二相聞の部における「石川郎女(女郎)」関連歌群は以下の通り。

(天智朝)

・久米禪師娉石川郎女時歌五首(九六―一〇〇)

(天武朝)

・大津皇子贈石川郎女御歌一首(二〇七)

・石川郎女奉和歌一首(二〇八)

・大津皇子竊婚石川女郎時、津守連通占露其事、皇子御作歌一首(二〇九)

・日並皇子尊贈賜石川女郎御歌一首(二一〇)

(藤原宮)

・石川女郎贈大伴田主歌一首(二二六)

・大伴宿禰田主報贈歌一首(二二七)

・同石川女郎更贈大伴田主中郎歌一首(二二八)

・大津皇子宮侍石川女郎贈大伴宿禰宿奈麻呂歌一首(二二九)

30. 石川内命婦は、安雲外命婦と姉妹であり、大伴安麻呂に嫁し、坂上郎女を産んでいる。集中、彼女の作歌は④五一八、②④四三九。その他③四六一左注、④六六七左注にもその名が見える。この他、集中には藤原宿奈麻呂の妻であったが離縁された「石川女郎」(②四四九一)もいるが、巻二の石川と「石川内命婦」が同一人物であるならば、この「石川女郎」はおそらく別人であろう。